

序

ミヤギフトシの肩書を一言でいい表すのは難しい。ミヤギは、ニューヨーク市立大学在学中に写真シリーズ《Strangers》(二〇〇五―〇六年)を発表し、以来、写真、映像、インスタレーション・アーティストとして発表をつづけてきた。二〇一七年には、「アメリカの風景」で小説家としての活動も開始する。小説家として、同作を含む自伝的三作を単行本『ディスタント』(河出書房新社、二〇一九年)にまとめる一方、太平洋戦争下に生きた女性たちを描いた「幾夜」(二〇二二年)も発表し、自身とは異なった時代の、異なった性別のマイノリティの物語をも生みだした。「幾夜」が、内容的に二〇一七年の映像インスタレーション《How Many Nights》の関連作と見られるように、ミヤギの小説とアートワークとは内容的に連関している。セクシュアル・マイノリティに対するミヤギの関心は一貫しているが、近年は、迫害されたキリシタンの歴史を想起する《いなくなつてしまった人たちのこと》／《The Dreams That Have Faded》(二〇一六年)のように、さまざまなマイノリティの物語へその関心を拡げているように見える。加えて、ミヤギの場合、出版やアートブックの書店勤務などもその活動の重要な一環といえる。

私をはじめて見たミヤギ作品は《The Ocean View Resort》(二〇一三年)だった。沖縄の離島を舞台とした、時代の異なる二組の男性カップルの音楽を介した交感——もともと、彼らの淡い関係をカッブルというのは憚られるかもしれない。あたかも壁にかけられた写真(静止画)が動きの中に解き放たれるような固定ショットとナレーションの協働に驚いた私は、ミヤギの映像作品の静止画的、写真的側面について書きたいと思った。本書所収の拙稿はその意図によって書いたものである。

二〇一八年、私は、インタヴューアーに町田恵美、コメンテーターに菅野優香の両氏を招いて、ミヤギの上映会とトークイベントを開催した「ミヤギフトシ上映会&アーティストトーク、二〇一八年一月二十一日、北海道大学総合博物館」。そのイベントの記録としてミヤギの資料集をつくろうとしたのだが、構想は長く停滞してしまった。ミヤギの場合、写真、映像、インスタレーション、小説の内容がメディアウムの相違だけでなく時間も超越して、しかも変更を加えられながら繰り返される。たとえば二〇一八年の小説「ストレンジジャー」は二〇〇五—〇六年の《Strangers》に取材した内容だが、異なった物語が綴られている。さまざまなアイテム、さまざまな登場人物がその都度インスタレーションや物語のなかで組み換えられていくのを目の当たりにして、私は美術史的、カタログレゾネ的資料集という当初の構想に無理があることを悟ったのだった。

停滞の後、私は、ミヤギの作品について幾人かの論者がそれぞれの観点から論じる論集作成へと方針を転換することにした。私自身のミヤギ作品への関心は、既に述べたように、作品の形式的側面にあった。しかしミヤギは、ニューヨークでセクシュアル・マイノリティの諸表現に触れただけでなく、フェミニズムやジェンダー、クイア理論を自らの作品に活かしてきた理論的アーティストである。加

えて、小説家でもある。そこで、美学、美術史学だけでなく、クイア理論を専門とする文学研究者を
探そうと考えた。美学的観点からの書き手として思い浮かべたのが、『花の名前／Flower Names』
(二〇一五年)に登場するなどミヤギ作品になかば内側から関わってきた、美学者の星野太氏だった。
星野氏による寄稿文「インビテーション」は、氏とミヤギとの友人関係を振りかえりつつミヤギの活
動を辿るもので、作品論というよりプロジェクト全体を概観してミヤギ作品の特質を指摘するという、
包括的な内容となっている。

ジェンダー、クイア理論については、専門家の菅野優香氏に相談した。岩川ありさ、シュテファン・
ヴェーラー両氏には、菅野氏のご紹介でご寄稿いただくことになった。岩川氏によるミヤギの小説集
『ディスタント』論は、やはり作品分析のスタイルをとらず、自身と小説とのいわば対話のように展
開する。そのスタイルは、他者と関わりつつ形成され、変形していく「自己の」記憶やアイデンティ
ティを論じた論の内容と呼応する。岩川氏の論では、「自己」をひらくだけでなく社会を変えていく
ツールとしてRPG(ロールプレイングゲーム)が指定されているのが印象的だ。ヴェーラー氏が取り上
げたのは『ディスタント』につづいてミヤギが発表した小説「幾夜」である。同小説のみならず、小
説中で登場人物たちを結びつける「オノト・ワタンナ」の小説『A Japanese Nighningale』(一九〇一年)
をも詳細に分析するヴェーラー氏の論は、その分析が同時に人種的、ジェンダー的ヒエラルキーに対
する抵抗、そして未来への希望に向かう点で、どこかパフォーマティブな一面を持っている。いつ、
どのような形態で出版されるのかも読めない企画にご寄稿くださった星野、岩川、ヴェーラー三氏に、
ご紹介の労をとってくださいました菅野氏に、心より感謝申し上げます。

既述の通り、本書はもとも資料集として構想された。本書後半部には、町田恵美氏によるミヤギのインタヴュー、ミヤギ作品の解説、参考文献表などを収載した。町田氏は、入念な事前準備のうえでミヤギの初期作品についての貴重な情報をひき出してくださっただけでなく、構想段階から相談のつてくださった。出版もアートワークの一環といえるミヤギの場合、収集した文献資料の選別、区別は大変な作業だった。その作業を担ってくださった郡田尚子氏にはただただ感謝している。Yuraka Kikurake Gallery の菊竹寛氏には、情報の提供や確認など直接的、間接的にご協力いただいた。その他、図版キャプションの確認などさまざまなかたちで本書の編集にご協力くださった方々に御礼申し上げます。

論集である前半の結びにミヤギ自身の文章が収められている。二〇一二年にはじまった「American Boyfriend」の活動を振り返りつつ近年の自身の活動を報じる同エッセイは、同プロジェクトの多彩さを指摘した星野氏の論への応答である。と同時に、初期作品に比重を置いた町田氏によるインタヴューの補完の面も持っている。コロナ禍でダメージを受けつつも、さまざまな力によって排除された人々の存在を物語として紡いでいこうとする同エッセイは、岩川、ヴェーラー両氏の論と感応しあっているようでもある。

本書の編集は、水声社の関根慶氏にお引き受けいただいた。氏のご尽力により、ミヤギの希望でもあった木村稔将氏にデザインをお引き受けいただくことができた。私ひとりでは百年かかってでも終わらなかったに違いのない作業を、美しく、手際よく取り仕切ってくださいました関根氏、深い洞察力と豊かな発想力を含み持つ端正なデザインを考案してくださいました木村氏には、尊敬と感謝の気持ちでいっぱ

いである。

既述した通り、ミヤギの作品は、厳密には単体では完結しない。「Y」も「ES」も「千代」も「雪子」も、異なったミヤギ作品に属性を変えながら繰り返し登場し、ゆるやかに物語をつないでいく。それらの連関をすべて辿ることのできる読者あるいは観者は、もしかしたらどこにもいないのかもしれない。私たちが見、読むことのできるのは終わりのない物語の断片に過ぎず、本書に収められたのもその断片に過ぎないのかもしれない。それでも私は思う——断片でもよいのではないか。断片を紡いでいくことこそ、ミヤギの作品とつながることなのかもしれない、と。

浅沼敬子

- 本稿本文ではミヤギフトシ氏のみ敬称を略したが、氏は、多忙のなか本書にエッセイをご寄稿くださっただけでなく、編集作業に惜しみなく協力くださった。心からの感謝をささげたい。
- 本書は、北海道大学大学院文学研究院の一般図書刊行助成を受けて刊行された。